

児童の投動作の評価基準作成における基礎的研究

Fundamental Study on developing evaluation standard of overhand ? throwing in elementary school children

1K06B131

指導教員 主査 吉永武史先生

高屋敷 仁

副査 木村和彦先生

< 緒言 >

投動作は、走運動などと比較して、運動経験の影響を強く受けること(出井,2000)が知られている。小学校における運動能力テスト、現在の新体力テストの「ソフトボール投げ」の記録の低下は、子どもたちの投動作の運動経験が減少していることを意味する。子どもたちを取り巻く生活環境や生活スタイルなど様々な要因が考えられ、自然には解消することはできないと考えられている。また、投動作は系統発達のな歩・走動作とは異なり、後天的に習得される個体発生的な動作である(桜井,1992)ことから、スキヤモンの発育発達曲線上、神経系の発達の著しい幼児期から児童期において投動作を学習する重要性が指摘されている。これらのことから学校体育において、より効果的に投動作を向上させる教材を作成し、実践していくことが求められているといえる。現在では、投動作に関する研究が多数行われており、体育授業での投能力の向上や改善を目的とした教材、教具の開発も様々行われている。これまでの実践では、オーバーハンドスローによる遠投距離を向上させるために、腰の回転や腕の振りといった投動作のフォームの改善を目的として授業が展開されている。理想とされるフォームに近づけることで投球動作の改善を目指す視点は、現在フォーム基準が多数開発され、動作の評価方法がわかりやすいという利点からきていると考えられる。そこで本研究では、小学校児童におけるオーバーハンドスローの投球動作の評価基準を作

成することを目的とする。

< 研究の方法 >

被験者に、2008(平成20)年3月に東京都内の小学校4年生39名(男子18名女子21名)を対象に投能力の測定を実施した。できるだけ遠くに投げるように指示した上で1人2球ずつ試投させ、より遠くに飛んだ方の記録を採用した。ボールは12インチのティーボール(ケンコー製)を使用した。また、被験者の側面からVTR撮影を実施し、VTR画像から本研究で作成した投動作の評価基準により投動作を評価した。評価の方法については、13個の各項目の基準を達成していれば1点。達成していなければ0点として分析した。

< 研究の結果 >

実験の結果ならびに考察から、投距離の上位者と下位者間に、投動作評価基準における点数の差が明確にはでた。それは、投距離と投動作評価基準における関連性に妥当性があると言える。しかし、投距離の上位者と中位者の差異を決定的には見い出すことはできなかった。

< 摘要 >

本研究の今後の課題として、実験の結果ならびに考察を踏まえた新たな投動作評価基準を用いて、様々な被験者を対象に有効性があることを検証していく必要がある。そして、この評価基準を基に、先行研究では未だほとんど提示さ

れていない並進運動の際の下半身の動きとトップの位置を主とする練習教材を作成をしていく必要がある。およびその教材を組み込んだベースボール型ゲームの単元計画の作成することで、より有効性のある学習指導プログラムを作成することが期待できる。